ISSN 0911-5587

楷

第三十四号

岡山大学
附属図書館報
OKAYAMA UNIVERSITY
LIBRALY BULLETIN

KAI
No.34

2002
FEBRUARY

<写真>
うどな
山澗濕地ニ生スウドニ似タリ

「備前国備中国之内領内産物絵図帳」より（岡山大学附属図書館池田家文庫所蔵）

— 目　次 —

● 「高度情報通信ネットワーク社会」における附属図書館資源生物科学研究所分館
（資源生物科学研究所分館長）…… p. 2
● シリーズ：電子情報をもっと知ろう②
—デジタルデバイド（情報格差）—（電子情報係）…… p. 4
● 展示会報告（情報サービス課）…… p. 7
● 会場から見た貴重資料展（青木充子）…… p. 9
● マスカット …… p.10
ガイダンス、古文献利用状況、業務システム更新、教官寄贈図書
● 会議・研修・編集委員から …… p.12

「高度情報通信ネットワーク社会」における附属図書館資源生物科学研究所分館

米　谷　俊　彦

広く農学の発展に寄与するために、資源生物科学研究所の前身の大原農業研究所内に農業の専門図書館ができたのは大正10年（1921）ですので、それから丁度80年の歳月が経過しました。この農業図書館は、大原美術館などの創設で有名な大原孫三郎氏によって設立されました。このような縁もあり、現在は研究所の正面玄関に移植され偉容を誇っている大原家ゆかりの大ソテツが、数年前まで史料館（図書館分館）前に植えられていました。

当時の記録を見ると、創設時には1,000余冊にすぎなかった図書は、その後急速に増加して、大正15年の蔵書総数は既に41,216冊に達しています。これらの蔵書は日本全国、ヨーロッパ、中国など多方面から熱心に集められたものです。現在分館の貴重図書になっているペッファー文庫、大原漢籍文庫、大原農書文庫などもその中に含まれており、いずれの文庫も数千冊から1万冊以上の大変貴重な書物からなっています。中でも、20世紀初頭をリードし世界的植物生理学者であったライプチッヒ大学植物学教室のペッファー教授が所蔵していたペッファー文庫は最も貴重なものです。第二次世界大戦中には、ドイツや日本の殆どの都市は戦火に焼かれたと聞いています。大正時代にドイツからはるばる船で倉敷の研究所に運ばれてきた1万2千冊に及ぶ厖大な図書が、戦火にも遭わず一冊も欠けることなく、我々の史料館で大切に保存されていることに言い知れぬ感慨を覚えます。これらの貴重図書で傷みの激しいものを少しずつ現在補修中ですが、その一部を史料館一階に展示しています。進化論で有名なダーウィンが、ペッファー教授に寄贈した彼のサイン入りの書籍も、他の多くの貴重図書と一緒に展示していますので、倉敷へ来られた時には、是非研究所に立ち寄って、ゆっくりとご覧下さい。

これらの文庫は、質は全く異なるものの、資源生物科学研究所近くにある大原美術館所蔵のエルグレコの「受胎告知」や、モネの「水蓮」などの名画に匹敵する、世界に誇ることの出来る大変価値の高い文化資料です。このような貴重文庫や貴重図書を補修しながら、今後も大切に保存していくことは、図書館分館の極めて重要な役目です。しかし、それにもまして、これらの貴重図書を、我が国はもとより、世界中の多くの研究者や学生、一般市民の方々に自由に利用して頂ける環境を整えることが必要と思われます。そのためには、大変な労力と多額の費用がかかるものの、岡山大学附属図書館で行った池田家文庫のマイクロフィルム化事業の場合と同じように、貸出の出来ない貴重図書、著作権の切れた古い書籍を順次選び出して、電子化して、情報ネットワークを通して提供することが必要と思われます。

我が国では、2000年に高度情報通信ネットワーク社会形成基本法が成立しています。この法案の目的は、情報通信技術の活用により世界的規模で生じている急激かつ大幅な社会経済構造の変化に的確に対応するために、「高度情報通信ネットワーク社会」の形成に関する施策を、迅速かつ重点的に推進することにあります。「高度情報通信ネットワーク社会」とは、インターネットその他の高度情報通信ネットワークを通じて、自由かつ安全に多様な情報又は知識を世界的規模で入手し、共有し、又は発信することにより、あらゆる分野における創造的かつ活力ある発展が可能となる社会と定義されています。そして、「高度情報通信ネットワーク社会」の形成は、すべての国民が、

インターネットその他の高度情報通信ネットワークを容易にかつ主体的に利用する機会を有し、その利用の機会を通じて、個々の能力を創造的かつ最大限に発揮することが可能となり、もって情報通信技術の恵沢をあまねく享受できる社会が実現されることを旨として、行われなければならないとされています。

まさに21世紀は、最新の情報技術を最大限に駆使して、厖大な図書情報が世界のどの場所からも自由に利用できる時代になるように思われます。また、今後図書館の形態や役割を考える際にも、そういう時代が早く到来するよう、岡山大学でも色々なレベルで知恵と工夫が発揮されることが要請されています。

80年にわたって資源生物科学研究所に営々と蓄積された農業、植物、環境科学、バイオ、一般科学などの雑誌や書籍は、現在約16万冊に達しようとしています。これらの書籍はそれぞれの時代に、各々の研究者が研究上や教育上必要と考えて購入したものと、研究所に関連の諸機関から寄贈された書籍や雑誌が大半を占めており、我が国の農学の図書館としては最も充実したものの一つになっています。これらの貴重な知的財産を大学における研究と教育、一般社会の多方面の利用者に有効に利用して頂けるよう、厖大な情報を整然と整理するためには、専門知識をもった優秀な図書館職員の方々の不断の努力が不可欠です。同時に蔵書の電子化を強力に推進するためには、豊富な資金が当然必要になります。また、電子化の実際の困難な作業を忍耐強く行うことのできる、多くのボランティアの人たちのご協力も是非とも必要になることと思います。

倉敷にある資源生物研究所分館は、研究所や岡山大学の他学部の研究者や学生のみならず、地域の住民、全国の大学、研究機関、図書館、地方公共団体などに日々多くのサービスを提供しています。津島の附属図書館とは離れているため、不便な点も幾らかあります。しかし、これらのハンディを克服しながら、長い伝統と個性ある図書館分館として、高度情報通信ネットワークを通じて自由かつ安全に、多様な情報又は知識を世界的規模で入手し、共有し、又は発信することによって、創造的かつ活力ある岡山大学附属図書館の一翼を担い、さらに発展して行きたいと希望しています。そのような希望が少しずつでも実現できるように、関係各位のご協力、ご支援を心よりお願い致します。

（まいたに・としひこ　資源生物科学研究所分館長）

シリーズ：電子情報をもっと知ろう②
ー 情報デバイド（情報格差）ー

電　子　情　報　係

今、国立大学は独立行政法人化・ITの積極的な活用・産学官連携・少子化問題など多くの難題を抱えています。このことは、国立大学も、従来のような横一線型（言い換えれば、“大船団型”）から欧米諸国の大学と同じように、大学間による競争化型へと変化の過程にあると言えます。大学が変化している今、その内側に存在する大学図書館も競争化時代をどのように生き抜くのか、経営的な戦略が必要な時代になっているのは否定できません。

デジタル化の波

大学図書館をとりまく環境は、日進月歩の速さで、かつ世界規模で大きく変わっています。ネットワーク技術の向上は、インターネットを普及させ、デジタル技術の進歩は大容量のデジタル情報の蓄積を可能としました。このことは、大学にいる研究者のコミュニケーションを広域的に活発化させ、その結果、大学における研究や教育活動は著しく向上したといえます。同時に、最先端を目指す研究においては、一層の競争化が著しくなった事も、無視できない事実と言えるでしょう。これを証明するように、発表される学術論文数は、年々増加傾向にあり、学術論文の評価ツールとして、ISI社のWeb of Scienceなどのインパクト・ファクター製品が重要視されています。

さて、図書館のサービスのあり方も、顕著に変化していると言えます。「情報の科学と技術」（Vol.50, No.6 2000）の特集“図書館生き残り作戦”に掲載された一論文で、JPモルガン社の豊田氏は、“図書館の再生と繁栄にむけて”の冒頭で、“図書館が転換期を迎えている”とインターネット時代の図書館像について書かれています。その中で、図書館サービスの変容として、3つの図を示しながら、伝統的図書館サービスの時代、データベース検索を組み入れた情報サービスの時代（商用データベースを活用して、情報センターを介してサービスしていた頃）、インターネット時代の情報検索（利用者がダイレクトに、目的の情報を入手するためにアプローチする現代）に分けて、それぞれの時代を概観されています。数年前まで研究者向けの先端サービスとして注目されていた、大学図書館によるCD-ROM検索サービスや商用データベースの代行検索サービスは、インターネット時代の今日においては、数年前に比べると色褪せたと言えるでしょう。

学術資料の形態も、利用者による電子情報への直接アクセスの時代を反映して、前号で書いたとおり、各社ともにライセンス化する方向が優勢です。大学の研究者や図書館職員は、外国雑誌の購入に関して、有形物のみの冊子体よりも、利用アクセス権の購入を中心にした電子ジャーナルを受け入れるべき転換期にあります。電子ジャーナルは、研究者が文献・学術情報を入手する際の簡便化・迅速化を意味するとともに、大学間競争に生き抜くための学術情報量や人的資源の基盤整備に繋がっていると言えるでしょう。

電子情報資料へのアクセス危機

2001年から2002年にかけて、国立大学図書館協議会ではタスクフォースを形成し、独自の電子ジャーナル・パッケージをもつ海外大手5出版社（Elsevier Science社、Academic Press社、Wiley社、

Blackwell Munksgard社、Springer-Verlag社）と2002年以降の価格テンプレート合意に向けて、交渉を行いました。この結果を受けて、わが国の国立大学は、2002年以降の一層の電子ジャーナル拡大に向けて、各大学ともに財源確保を検討いたしました。

岡山大学附属図書館でも、図書館運営委員会に電子ジャーナル整備検討小委員会を設置して、この問題について検討を重ねましたが、大学の学内予算配分方式の変更は、各部局や研究者に図書館へのこれ以上の負担は承認できない意見が多く、大手5社の電子ジャーナル・パッケージについては導入の実現はできませんでした。また、図書館資料費も大幅減となり、図書館資料費から電子ジャーナルを導入する予算を創出することは、困難どころか無理と言わざるを得ない状況となりました。岡山大学附属図書館の電子ジャーナル整備状況は、国内の同一規模の大学図書館と比較してみても、決して充実した状況にあるとは言えないでしょう。

この中には、1999年からサービスしてきたElsevier Science社の「Science Direct」（過去約5年分の電子ジャーナル）も含まれているので、2002年からは「Science Direct」は利用できなくなります。代わりに、Elsevier Science社の2002年冊子体購読誌については、閲覧日から過去1年間の電子ジャーナルを見られるだけなので、「Science Direct」ユーザにとっては質の低下を実感することになるでしょう。中国・四国地区の国立大学で、2002年に「Science Direct」を利用できない大学は、岡山大学を含めて3校のみです。この他にも、出版社側のライセンス形態の変更により、2002年に全文アクセスができなくなる電子ジャーナルとして、Wiley社系列の「InterScience」に含まれる購読タイトル、「Nature」とその姉妹誌などがあります。外国雑誌購読を冊子体オンリーで購読している昔ながらの方式を続けているだけでは、基本的に冊子体のタイトル数の規模に依存するので、国内外の大学で普通となっている膨大な種類の電子ジャーナルへのアクセス環境の充実はありえないでしょう。むしろ、図書館資料費が減少傾向にある岡山大学の現状において、外国雑誌の購読タイトル数は減少傾向にあり、2002年の電子ジャーナルへのアクセスは、危機的状況に陥っていると言えます。

本文の冒頭で、大学は競争化時代に入ったと書きましたが、インターネット時代の日本の大学図書館も、電子情報アクセスの環境整備の面で、競争化時代に突入したといえます。日本とアメリカにおける大学図書館の電子的サービスの比較調査を行い、“日本の大学図書館は学術資料・貴重資料の電子化に予算をそそぎ、アメリカの大学図書館は電子情報資料の利用ライセンス取得に予算を注いでいる”という慶応大学の上田氏ほかの報告があります。

http://www.slis.keio.ac.jp/~ueda/libwww/libwwwes.html

http://www.slis.keio.ac.jp/~ueda/semi/2000e-service.pdf

この結果を見るとき、岡山大学附属図書館にとって、競争に生き残る条件として、電子情報資源（全文情報・二次文献・WWW資源）へ学内外からアクセスできる環境（電子情報資源、インフラ整備）を整えて、教職員・大学院生・学生に提供できるようにすることは不可欠と言えるでしょう。そのためには、価格が毎年流動的に変化する電子ジャーナルを確保するために、大学からの財政的支援は不可欠であり、現状のままでは、岡山大学の研究・教育活動は他大学に淘汰される可能性があります。

世の中には、「デジタルデバイド（Digital Divide）」という言葉があります。Google検索エンジンを使って、その言葉を調べると、「情報化にともなう情報格差、そこから発生する経済格差。インターネットを使いこなして経済的利益を得る人と、使いこなせない人との格差と考えればわかりやすい。」とありました。この状況は、大学の電子情報資源アクセスの世界も同じです。例えば、

2002年に岡山大学がElsevier Science社の「Science Direct」のライセンス購入を断念した事は、経費をかけてライセンスを導入・取得した他大学に比べて、岡山大学に所属する研究者や学生は文献入手の面で情報格差をつけられ、まさに「情報デバイド（Information Divide)」になりつつあります。電子ジャーナル・パッケージや二次文献情報データベースなどライセンス取得に基づく製品について、費用対効果（コストパフォーマンス）を考えた見直しを2003年に向けて、実行しなければなりません。

Web型二次文献情報データベースへの転換

岡山大学附属図書館では、2001年にいくつかの電子情報製品のトライアル実験を行いました。主な製品としては、Elsevier Science社「Engineering Village」、ISI社「Web of Science」、EBSCO社「EBSCOhost」、ProQuest社「PROQUEST 5000」、CAS「SciFinder Scholar」です。特に、ISI社「Web of Science」のトライアル実験では、検索回数が1ヶ月で約20,000件を超えました。アンケートの結果、導入を強く望む自然科学分野の教官を中心にした若手研究者（助教授から助手）や大学院生の声を数多く聞くことができました。少し余談になるかもしれませんが、ISI社は、2001年春に「Web of Science」を中心にしたプラットフォーム“ISI Web of Knowledge”を発表しました。

http://www.isinet.com/isi/products/webofknowledge/index.html

このプラットフォームでは、ISI社の有償のWeb製品「Current Contents Connect」、「INSPEC」、「BIOSISPreviews」、「JCR on the WEB」、「Essential Science Indicators」、「ISI Proceedings」、「Derwent Innovations Index」、「ISI Chemistry」、全文アクセス権を持つ電子ジャーナル、インターネット上の学術サイトと「Web of Science」の間にリンク構造を形成して、研究者が検索した結果から様々な関連情報へのアクセスをナビゲートしてくれる仕組みになっています。研究者にとって、単なる二次文献情報データベースの検索だけでなく、検索結果から他データベースへのリンク、複数のデータベースのクロスサーチ機能、電子ジャーナル全文へのアプローチ、文献整理ソフトへの取り込み機能などをもったプラットフォーム作りも必要だと思います。

2003年の二次文献情報データベースの選定について、財源と経費のバランスがデータベースの値上がりにより厳しい折、見直しを行うことが2001年12月に開催された平成13年度第3回附属図書館運営委員会で可決されました。また、2002年は「CA on CD」と「Chemical Abstracts」の冊子体を中止して、「SciFinder Scholar」に、判例全文データベース「リーガルベース」を中止して「TKC法律情報データベースLEX/DB Internet」に切り替えることになりました。ただし、経費負担の面から見れば、何ら変化があるわけでないので、財源不足状態の二次文献情報データベースを2003年以降どうするかの見直しでは、無駄のないWeb型二次文献情報データベースへの転換が望まれます。

池田家文庫等貴重資料展「岡山藩江戸藩邸ものがたり」について

情報サービス課

はじめに

附属図書館では毎年、池田家文庫等の貴重資料の中からテーマを定めて展示会を開催し、一般市民に公開している。

今年度は平成13年10月23日（火）から11月１日（木）までの10日間、「岡山藩江戸藩邸ものがたり」と題して開催した。

江戸幕府は大名統制策のひとつとして、大名を１年交替で江戸と国もとに住まわせ、その妻子は江戸に常住させた。このため、各藩は江戸にいくつもの藩邸を持ち、多数の武士やその家族がここで生活していた。18世紀の初頭の、岡山藩池田家の江戸本屋敷は、敷地8,000坪で、大半は御殿の部分であった。表御殿は、藩主の公的な応接・儀式・重臣らの執務が行われる空間であり、奥御殿には藩主やその妻子が住んだ。御殿の外側には、参勤交代に付き添った家臣たちが住む長屋があった。

今回は、こうした江戸藩邸の絵図を中心とした資料約30点を展示したが、期間中約550名の入場者があり、それらの方々からいろいろなご意見が寄せられた。ここにその概要を報告する。

展示資料一覧

1. 分間江戸大絵図
2. 御納戸大帳
3.-1 御士帳
   -2 御切米帳
4. 諸職交替
5. 江戸御本屋敷絵図
6. 江戸留守居跡役存寄書上
7. 江戸御本屋敷御玄関建地割図
8. 江戸御上屋敷御鑓ノ間御広間平建地割図
9. 江戸御本屋敷御火ノ見櫓建地割図
10. 江戸御本屋敷御鞠場建地割図
11. 日次記　元禄11年
12. 伊木清兵衛宛池田靱負用状
13. 江戸御上屋敷御庭之図
14. 江戸御向屋敷絵図
15. 向御屋敷御部屋御住居絵図
16. 日次記　享保元年
17. 日次記　享保２年
18. 江戸長屋割御定法
19. 江戸築地御屋敷絵図
20. 大崎御屋敷諸事留帳　明和６年
21. 大崎御屋敷諸事留帳　明和７年
22. 大崎御屋敷日記自分留
23. 江戸大崎御屋敷絵図　元文２年
24. 江戸大崎御屋敷絵図　明和９年
25. 大崎屋敷につき屋敷改奉行への書付
   -1 大崎御屋敷仕添地書付
   -2 山内甚六郎口上覚
26.-1 角筈屋敷絵図
   -2 角筈屋敷につき書付
27. 三河町屋敷につき覚書
28. 人見友元屋敷被召上候売券状
29. 日次記　元禄９年

講演会

10月27日（土）午後２時から４時までの２時間，東京大学史料編纂所教授の宮崎勝美氏を講師として「岡山藩の江戸藩邸」と題する講演会を、新館５階大会議室で開催した。入場者は約70名で、武家地の土地制度や大名屋敷の性格などから始まり、岡山藩邸の時代による変遷、OHPを使用した藩邸各建造物等の解説などに熱心に耳を傾けていた。

来場者統計

1. 年齢

24歳以下　30%　　25～34歳　13%　　35～44歳　11%

45～54歳　13%　　55～64歳　13%　　65歳以上　20%

2. 性別

男性　61%　　女性　39%

3. 所属

学内学生　35%　　学内教職員　16%

学外学生　3％　　学外教員　5％　　学外その他　41%

4. 住所

市内　68%　　市外（県内）　22%　　その他　10%

5. 来場の情報源（重複回答）

新聞　24%　　ポスター　42%　　雑誌　0％　　その他　37%

その他内訳（講義で紹介、TV、知人・友人から、図書館にきて、等）

6. 来場理由（重複回答）

内容に興味　76%　　近いから　15%　　時間に余裕　11%

図書館に興味　4％　　その他　11%

その他内訳（授業で，講義のレポートのため、知人・友人の勧め、等）

7. 展示点数

多い　4％　　適当　70%　　少ない　26%

8. 解説内容

難しい　17%　　普通　72%　　易しい　11%

9. その他意見等

・歴史を具体的に教わりました。
・藩主の江戸での生活の様子がわかるパネルがほしい。
・火事の年表はわかりやすい。大火の多かった年がよく確認できる。
・書き下し文がついていて、わかりやすかった。
・簡単な現代語訳があればよかった。
・「ものがたり」というテーマなのに、物語を感じられなかった。
・パソコンに取り込んだ画像が鮮明でよかった。
・読み下し文に加えて、内容解説を加えるとよい。

ほか

おわりに

今回の展示は「江戸藩邸」というテーマのためか、絵図類も地味なものが多かったが、それでも約550名の方々に来場していただいた。熱心に時間をかけて観覧されていた人も多く見かけた。講演会も、大会議室が若干窮屈に思えるほどの人においでいただいた。

準備に時間がかかりPRが十分でなかったことは、次回への反省材料となった。

ご来場いただき、貴重な御意見を賜った方々にお礼を申し上げます。次回にもどうぞご期待ください。

会場から見た貴重資料展

青　木　充　子

池田家文庫等貴重資料展は、1997年新館の開館に合わせて再開され、今回で5回になります。毎回会場係として参加させていただいた立場から、会場の様子を思いつくままに書き留めてみました。

各回のテーマは次の通りです。第1回は岡山城築城400年を記念した「絵図にみる岡山城」、第2回は瀬戸内海上交通に関する「岡山藩と海の道」、第3回は翌年の後楽園築庭300年に合わせて「後楽園と岡山藩」、その中には絵図類のデータベース化事業の作業中に甦った後園図も展示されました。第4回は近世初期の備前国に関する「備前慶長国絵図のふしぎ」、そして今回は、岡山藩の江戸での暮らしぶりに関する「岡山藩江戸藩邸ものがたり」でした。毎回それぞれのテーマに則してより分かり易い展示になるよう種々工夫されていました。

まず、この様な展示をするにあたっては、来館者数がどの程度になるか、内容に関心を示してもらえるか、理解してもらえるかということが気にかかるものです。来館者数は平均すると約750名程度で、期間が10日間であり、会場が図書館の5階ということを考えれば、まずまずの数だと思われます。内容の理解については、毎回展示の主題と各史料についての丁寧な解説を載せたパンフレットを入口で配し、会場内にもそれぞれ簡明な説明文を添えてありました。ただ、文字が小さくて読めないといわれることも多いので、この点はもう少し改善の余地があるようです 。またパンフレットは、第3回から展示史料のカラー写真も掲載されてより充実したものになり、後から見直すのにとても便利だという声もあって好評なのですが、これを参照しながら展示を見て回る方は少ないようです。そこで、多少でも理解の助けになればと思い、拙いながらも説明を加えて“よく分かりました”などといわれると、ついつい力が入ってしまうのです。しかし、できるだけ多くの方にと思ってみても来館者全員に説明できるわけでもなく、いつもこれでいいのだろうかと悩んでいます。

また、会場係は、展示史料に損傷がないよう心を配る必要がありますが、それが思うに任せないこともままあります。広さの制約からやむを得ず展示台より史料の方が大きいときなど、熱心なあまり近づき過ぎてしまう方も多く、“展示史料に触れないで下さい”と言葉に出して注意するのは、思う以上に勇気のいるものです。思い余って注意をして、逆に叱られたこともあります。なかなか難しいもので、これもまた心痛むことです。

しかし、毎回必ず“これは全部本物ですか”と尋ねられます。“その当時のものです”と答えると、“すごいですね”と感嘆され、続いて“よくこんなにきれいに残っていますね”と保存の良さを褒められ、さらに“これはどこにあるのですか”という問いに“全部この図書館のものです”と答えるころには、思わず嬉しくなってしまいます。複製やデジタル画像による展示が多くなりつつある昨今、原本のもつ迫力は何物にも代えがたいものがあり、その意味でも貴重な展示だとつくづく感じます。さらに、毎回楽しみにしていますという方があることや、高校の授業 や大学の講義の一環として利用され、歴史教育に役立っていることも嬉しいことです。

大きな絵図だと中心部分がよく見えないといわれることがあります。現在絵図の一部をデジタル画像で公開していますが、これが更に充実して、展示で見た絵図を画像を通して細部まで詳しく見ることができる、あるいは逆にデジタル画像の原本はこんな絵図だったのかと理解を深めることができるという形で、貴重な史料がより多くの方に利用されるようになれば、史料も生かされ、どんなにか素晴らしいことだと思います。

（あおき・みつこ）

マスカット

二次文献情報データベース・ガイダンスの実施について

附属図書館では、平成13年度（４月～11月期）において、下記のとおり、二次文献情報データベース・ガイダンスへの参加申込みがあり、附属図書館で実施いたしましたので報告します。（参加人数は延べ数）

（分野別）

①MLA	7名
②PsycINFO	46名
③Chemical Abstracts	30名
④Current Contents	30名
③雑誌記事索引	64名
④朝日新聞記事データベース	28名

（学部別）

①文 学 部	10名
②教育学部	95名
③経済学部	28名
④工 学 部	25名
⑤薬 学 部	5名
⑥農 学 部	30名
⑦大学院教育学研究科	12名

古文献利用状況―複製・掲載許可、展示貸出

池田家文庫等の古文献資料は、研究のための閲覧などのほか、図書・雑誌への図版掲載や放映を目的としたビデオ収録、博物館等の企画展示への貸出などにも提供されています。近年では、CD-Rへの複製やホームページ掲載などを目的とする利用が増えています。

項目＼年度	平成10年度	平成11年度	平成12年度	平成13年度 4～12月
複製・掲載許可件数	62	65	64	44
(VTR)	(12)	(10)	(6)	(5)
(電子媒体)		(4)	(5)	(4)
展示会貸出件数	4	8	7	7

（　）内数

附属図書館業務用電子計算機システムの更新について

附属図書館業務用電子計算機システムは、平成14年1月に新システムに更新しました。今回の更新における主な改善点は、次のとおりです。

①業務用サーバ・検索用サーバの性能向上
②蔵書検索OPACのレスポンスの改善
③Z39.50プロトコルによるOPACサービスへの対応
④WEBからの図書選書依頼・文献複写申込サービスへの対応
⑤OVID文献検索データベースとの連携による文献複写申込機能への対応
⑥図書館システムのGUI環境による操作性の向上
⑦国立情報学研究所の新目録所在情報サービス（新CAT/ILL）への対応
⑧多言語化への対応

教官からの寄贈図書リスト

次の方々から著書を寄贈いただきました。ありがとうございました。今後とも、ご理解とご協力をお願いします。

＜中央館＞

井上成信［名］
原色ランのウィルス病：診断・検定・防除――農村漁村文化協会，2001　(627.57/I)

児嶋隆（共訳）［経］
公認会計士監査：米国POB＜現状分析と公益性向上のための勧告＞：監査の有効性に関する専門委員会報告書――白桃書房，2001　(336.97/K)

中東靖恵（編）［文］
岡大生の言語生活――岡山大学文学部中東研究室，2001　(814.4/O)

新納　泉（共著）［文］
考古学のためのGIS入門――古今書院，2001　(202.5/K)

村田芳子（編著）［教］
最新楽しい表現運動・ダンス：小一～小六：踊る楽しさと身体表現の魅力を探る『面白ダンス指導ハンドブック』――小学館，1998　(375.492/M)

＜鹿田分館＞

小野清美［医］
アンネナプキンの社会史――宝島社，2000　(598.2/ON)
女のトイレ事件簿：ナプキン先生性と生を語る――TOTO出版，1993　(518.5/ON)

許南浩［大医歯］
汚名に泣くがん遺伝子：がんに備えて考える――日本評論社，1995　(491.6/HU)
分子生物学研究のための新培養細胞実験法改訂第2版（共編・共著）――羊土社，1999.4　(491.1/BU)

＜資源生物科学研究所分館＞

井上成信［名］
原色ランのウィルス病：診断・検定・防除――農村漁村文化協会，2001　(334/128)

（敬称略五十音順）

会議

◆学外

13. 9. 10　岡山県大学図書館協議会第２回研修委員会（於　岡山理科大学図書館）
・平成13年度研修事業について、他

10. 11～10. 12　平成13年度国立大学図書館協議会中国四国地区協議会実務者会議（於　香川大学附属図書館）
・利用者関係サービスについて、他

10. 24～10. 26　第42回中国四国地区大学図書館研究集会（於　高知大学附属図書館）
・生涯学習と大学図書館、他

11. 1　平成13年度中国四国地区国立大学附属図書館事務（部・課）長会議（於　広島大学附属図書館）
・電子的情報資料整備に係る財源等について、他

11. 8～11. 9　第37回日本医学図書館協会中国・四国部会総会（於　ホテルハーベストイン米子）
・第73回日本医学図書館協会総会における地区協力の依頼について、他

11. 9　岡山県大学図書館協議会第３回研修委員会（於　岡山大学附属図書館）
・閲覧業務について、他

11. 28～11. 29　第14回国立大学図書館協議会シンポジウム（於　京都大学附属図書館）
・電子ジャーナルの導入と利用者サービスについて、他

14. 1. 17～1. 18　平成13年度国立大学附属図書館事務部課長会議（於　山形大学附属図書館）
・大学構造改革における図書館の関わり、他

◆学内

13.12.18　平成13年度第２回附属図書館運営委員会

研修

・平成13年度（後期）岡山大学職員研修（放送大学科目履修コース）
参加者　木地寛子（10. 2～14. 2. 1）

・平成13年度岡山大学事務系職員語学研修（英語・中級コース）
参加者　西村朋子（10.10～12. 3）

・平成13年度第２回岡山大学会計（簿記）研修
参加者　加藤由枝（10.18～14. 1.10）

・平成13年度大学図書館職員講習会
参加者　犬飼恵美子（11. 6～11. 9）

・平成13年度岡山県大学図書館協議会研修会
参加者　木村正昭、竹下啓行、四方幹子、中山栄美子（11. 9）

編集委員会から

今号では、資源生物科学研究所分館長の米谷教授に、「高度通信情報ネットワーク社会」における同分館の取り組みについてご紹介いただきました。

また、「シリーズ・電子情報をもっと知ろう」では、デジタルデバイドについて論じています。電子情報を入手でき活用できる人とそうでない人とでは、業績に大きな差が生じるだろうということは容易に想像できます。情報アクセスのための基盤整備は、全学をあげて取り組むべき課題といえます。

春は別れの季節、また、出会いの季節。いろいろなことについても、新鮮な出会いを期待したいものです。

岡山大学附属図書館報「楷」　No.34　平成14年２月28日
発行人　香川一郎　　編集　広報委員会
岡山大学附属図書館発行　〒700-8530　岡山市津島中三丁目1-1　電話　086-252-1111
ホームページURL　http://www.lib.okayama-u.ac.jp/